



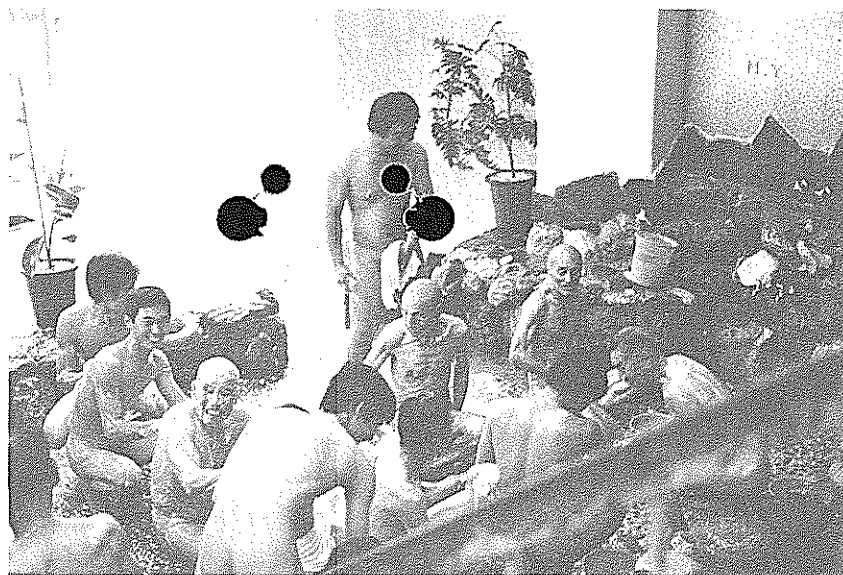
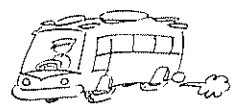
思いは1つ三代の青年たち —唐子浜で—

明治
大正
昭和

青年のバスはゆい



酒はうまいを喉にしみ
先輩の声、やさしく心
にしみる



「おまん、どこ見ゆうぜよ。湯気の中から笑いがこぼれ、泡の中からやさしさがわく。げに三代青年のバス万、万歳の一コマ。」

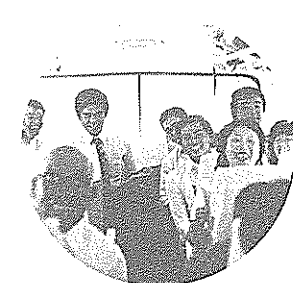


世代間のコミュニケーションの不通を断絶という。しかし、コミュニケーションの不通は、同世代でもある。いつの時代にもある。マスコミが生み出した「断絶」という言葉を怪物にしてしまったのは私たち自身だ。「断絶。が人間のふれあいを食いつぶしてゆく。三代青年は、現代の混とんの中から「ふれあい。を救い出しに鈍川温泉（にぶがわ・おんせん）へ行った。」

断絶の正体見たり 枯れ尾花



宣言、ワレワレハ ココニ ダンゼツラ コクフクシタ



青年が明日への決意を語れば、先輩たちがこたえていう。「若い人たちのために、私たちができることならよろこんでお手伝いします」
無事、市役所前に帰りつく。別れ。三代青年が堅く握りあう手は、未来へ明るい光をなげかける。

「昨夜はどうでした？」
「寝床に入っても話がつきあった十二時ごろまで夜這（ば）いの話をしたぜよ」（笑い）「残念なこととは、若い女性に体を流してもらえなかったこと……」（拍手）
そして明治の青年がこういった。「なんといっても、やせん、若い人が背中を流してくれたことです。これは息子や女房でも、してくれらることじゃあないきに、死ぬ時のよい土産ができました。まっこと涙が流れるくらい嬉しいことです。」

六月九日、晴れ 二十八名の三代青年たちが市役所前にあつまつて九時半、出発。
バスのなかには自己紹介と自慢の歌。七十五歳のおばあさんの手にもマイクがまわる。そよ風と美声と笑い声のハーモニー。
松山市で青少年センターを見学なかでも、料理教室、視聴覚音楽室にはビックリ。「まっこと、かゆいところまで手がとどいちゆうのお」
バスのなかで昭和の青年がいう。「私たちは、竜馬がそうであったように、自分の命をぶつけるものをさがしています。何にぶつけ、どうしてそれを見つけたらよいか……」
夕方、鈍川温泉到着。さっそくお湯につかり、背中が流しい。風呂にはいりながら怒る人はまさない。笑顔、笑顔、笑顔。「寿命がのびるのお、こりゃあ」「毎日、こやつて若い人と背中を流しおうたらなんばかやろうぜよ」
「三つの時代が一つの風呂で、背中を流してはがらかに、世代も忘れて楽しく語ろう。三代主佐の青年よ」（三代青年のバスの歌）
晩めし。各班ごとに演芸、語り飲み、そして踊る。
静かな谷あいには、かじかの声がひびきわたる。その夜、三代青年の夢枕をむすんだものは何であつたらう。

六月九日、晴れ 二十八名の三代青年たちが市役所前にあつまつて九時半、出発。
バスのなかには自己紹介と自慢の歌。七十五歳のおばあさんの手にもマイクがまわる。そよ風と美声と笑い声のハーモニー。
松山市で青少年センターを見学なかでも、料理教室、視聴覚音楽室にはビックリ。「まっこと、かゆいところまで手がとどいちゆうのお」
バスのなかで昭和の青年がいう。「私たちは、竜馬がそうであったように、自分の命をぶつけるものをさがしています。何にぶつけ、どうしてそれを見つけたらよいか……」
夕方、鈍川温泉到着。さっそくお湯につかり、背中が流しい。風呂にはいりながら怒る人はまさない。笑顔、笑顔、笑顔。「寿命がのびるのお、こりゃあ」「毎日、こやつて若い人と背中を流しおうたらなんばかやろうぜよ」
「三つの時代が一つの風呂で、背中を流してはがらかに、世代も忘れて楽しく語ろう。三代主佐の青年よ」（三代青年のバスの歌）
晩めし。各班ごとに演芸、語り飲み、そして踊る。
静かな谷あいには、かじかの声がひびきわたる。その夜、三代青年の夢枕をむすんだものは何であつたらう。

